【六月二十三日読売新聞】

融合めざす思想を

国も、階級もこえた道義革命へ

加藤　シヅエ

去年の夏、私は数人の社会党員のグループと共にアメリカ及びヨーロッパを訪問する機会を得た。

フランスではもとの織理大臣であり、かつこの五年間揺るぎない社会党の党首として活躍しているギー・モレ氏と会見した。

モレ氏は一年前（今から二年前）ドゴール氏が政権につく直前フランス国内に人民戦線の結成の動きが非常な高まりを見もた時のことを語つた。モレ氏の率いる社会党は、人民戦線による政局への圧力は欧州における自由と民主主義の終末を意味するものであると確信し、ドゴール支持に踏み切つた。

「国内における融合はわれわれの最大関心事である」これがモレ氏が私に語つた言葉であつた。

西ドイツではベルリンの市長で生粋の社会民主党員であるウィリー・ブラント氏の招待を受けた。氏は「われわれドイツ人は、全体主義の経験は、それがファッショであれ共産主義であれ一度でたくさんだと思つている。われわれは基本的人権の擁護をあくまでも支持する」といつた。彼はベルリンが一方で非常な強迫を受け、怖れによつて非常に神経質になつているさ中でこの信念のもとに自由ベルリンの存在を守つて来た経験を語つてくれた。またベルリンでは社会民主党員や組合指導者の人々が東独や東欧で社会主義者のたどつた運命について私どもに話してくれた。この人々はそれぞれの国で、労働者のための政府を樹立するために共産主義者と共闘したのである。その後この人々は例外なく共産主義者の手によつてその地位を追われ、大部分は長く牢獄（ろうごく）生活を続けた後に、ある者は射殺され、ある者は病死した。すなわち全体主義政権の最終的確立のためには社会主義者は最大の障害であつたのである。

パリ巨頭会談の失敗にともなつてドイツ社会民主党は、その外交政策を全面的に改定したと伝えられる。ドイツ社会民主党の国会対策責任者カール・モマー氏は新聞発表の中で次のようにのべている。「国家の安全が危険にひんしている。このような事態の中で、これ以上国内的に意見の対立、抗争を続けているわけにはいかない」と。

北欧諸国で私どもが一番驚いたことは、ここ数年間の非常な生活の高水準、完備した社会保障制度などにもかかわらず、青少年犯罪や共産主義思想の浸透はますますその力を増しているということであつた。

フィンランドでは同国社会党の父といわれる元総理大臣のタンナー氏に会つた。一九三九年同氏が首相時代、ソ連の強引な内政干渉に対して断固これを拒否したところ、ついに武力をもつて干渉して来て戦争となつた経緯について話してくれた。現在フィンランドの輸出の二割はソ連向けであるが、ソ連の意志に従わないときはソ連はたちどころにその輸入を差し止めフィンランド国内の失業と経済的混乱の誘発するという状態である。

この旅行を通じて私たちの会つた社会党指導者の言葉は次の三点に要約される。

一、各国で行なわれた共産党との「平和共存」「共闘」「人民戦線の結成」等の考え方は常に、結果において勤労大衆の真の利益と相反するものであつた。

二、現在、社会主義にとつて融合をつくるイデオロギーが最も必要である。それなしには社会党は分裂につぐ分裂を続けることとなる。MRAが主唱する道義革命の実践こそがその融合のイデオロギーであると、これらの社会主義指導者は一様に感じている。

三、勤労大衆の生活水準の向上につとめることは社会主義の当然の義務であるが、それと同時にわれわれが世界的なイデオロギー戦の渦中にあることを忘れてはならない。万一この戦いに敗ければわれわれは今まで戦つて来たすべての自由を失つてしまうのである。

真に社会党を愛し、日本を愛する者として私は現在の危機に際し社会党はもちろん、日本に正しい方向を発見するため諸外国の社会主義者たちの経験に耳を傾けることが絶対に必要であると思う。

各国の社会主義指導者たちは階級闘争はすでに時代おくれであるという結論を出しているのである。われわれもこの中から何かを学ぶことができるのではあるまいか。原子時代の今日、階級闘争を押し進めることは原子戦争への道である。

われわれはもちろん新しい、よりよい社会、経済制度を作るための戦いを続けなければならない。しかしどんなによい制度を作つたとしても、それを運営する正しい人間を作ることができなければ、われわれの戦いは結局現在と形はかわつていても本質的には同じの搾取社会を作る結果となつてしまうであろう。

しかし今われわれが過去において、あるいは党として、あるいは個人として犯して来た間違いをはつきりとみとめてこれを改めるだけの勇気を持つているならばきつとよりよい社会を作ることができる。そしてフランク・ブックマン博士がいつたように「失業者には職業を、空腹の人々には食物を、そして空虚に乾いた心には真の満足を与えうるような思想を」何百万国民大衆に与えることができるであろう。

資本家をも、共産主義者をも変えることができる大きい思想に生きること、それが真の社会主義者の使命だと私は信じている。